「大地を受け継ぐ」上映会を行って

中津市　村上和代

きっかけは豊後高田上映会でうけた衝撃

今年の６月２９日に中津教育福祉センターで「大地を…」の上映会を友人と三人で企画したきっかけは、３月15日に豊後高田市で行われた上映会。福島の農業の現実を伝える映画をやるんよーと知人から聞いて、友人と三人で出かけた。帰りの車の中では、三人でこの映画をぜひ中津でしよう、という話になり日時、場所もさっそく決めて呼びかけを始めた。

映画を上映したいと思ったのは、3.11の後、今も大変なおもいをされている人たちがたくさんいるという現実を忘れてはいけないと、改めて思ったこと、被災した福島に原発がなければここまで苦しむことはなかったと原発のおそろしさを改めて実感したこと、国や東京電力の対応の思いやりのなさ、被災地の方々の悲しみを共有したいと思ったこと、などが挙げられる。また、福島で今も農業を続けている樽川和也さんの話を真剣に聞こうとする若い方々がいることに未来の希望も持った。

様々な感想が寄せられた

上映会をしてみて、「観ることができてとても良かった」という感想を沢山頂いたと同時に、何人かのアンケートには、だからと言って福島のお米や野菜を買おうとすぐには思えない、という率直な感想もあった。また福島に残るという選択をすることが考えられない、そんな危ないところは出るように引っ越しを勧めるべきなんじゃないか、という意見もあった。またあの映画は“やらせ”のようにも感じた、という意見も。

福島の現実を知り、そこに住む人たちの悲しみや苦しみを忘れず、自分たちのできることをしていきたいという感想や原発事故の本当の被害を「風評被害」という言葉にすり替えているマスコミに怒りを感じる、というこの映画の伝えたいことを、ちゃんと受けとめてくれているなと感じる感想を多くもらったなか、このような意見に、私たち企画側は戸惑いも感じた。しかし、このような意見があったことで、私自身もこの映画の発信していることについてもう一度考える機会をもらった。

福島の現実について深く考えさせられた

たとえば、この映画から福島の農家の方の大変さがわかったので、福島の人たちが作った野菜をぜひ買いましょうと、どの人にも言えるだろうか―と。小さいお子さんをもつ方に話すことは躊躇する、しかし、大気汚染や見かけのきれいな野菜を売上げを上げるために作ろうと努力する現在の世の中、福島以外の野菜が安全かどうかはわからないのではないか、とも思う。また、危ないのだから福島の土地を離れなければと言われても、自分が暮らしてきたこの土地からそう簡単に割り切って離れていくことが、全ての人にできるだろうか…と。私自身がその立場になったと考えてみても、今までの人間関係や土地への愛情を断ち切ってほかの土地に住むことが、あっさりとできるだろうか―と。また、事実を訴えていることが「やらせ」に感じたというのは、監督の伝えたいことが写されているということではないかと思う。

井上監督はこの映画を通じて福島の現実を忘れないでほしい、自分たちのできることは何かを考えてほしいと、働きかけているのではないだろうか。各地でこの映画が広まっていけばいいなと思う。

映画の主人公である樽川和也さん